



Pure 純 No.186 Pacific パ Jul.2016

純パの会会報『純パ』第186号

2016年7月30日発行／発行：純パの会

交流戦所感

今年もパシフィック・リーグが60勝47敗1分でセントラル・リーグを圧倒した。このような状態が12年も続いているとセ・リーグ側も深刻に考えなければならぬのだが、観客動員数が増加しており、それで満足してしまっているのだから始末が悪い。

交流戦が始まったのは2005年からであるが、それ以前に交流戦があったらプロ野球の歴史も変わっていたのだろうと思う。特にジャイアンツのV9時代に交流戦があったら面白い展開になっていたことだろう。V9時代、ジャイアンツは別にしてそれ以外のセ・リーグ5球団が昭和40年代当時のパ・リーグ各チームと対戦したら、おそらくパ・リーグが圧倒的に勝ち越したはずだ。

あの頃のパ・リーグには年間に40本のホームランを打てるバッターは各球団に揃っていた。南海ホークスには野村克也(昭和40年42本、45年42本)、阪急ブレーブスには長池徳二(昭和44年41本、46年40本、47年41本、48年43本)、東映フライヤーズには大杉勝男(昭和45年44本、46年41本、47年40本)、近鉄バファローズには土井正博(昭和46年40本)がいた。それに対しセ・リーグでは王貞治以外で40ホームランを記録したのはサンケイアトムズのロバーツのみ(昭和43年40本)。田淵幸一(阪神タイガース)も山本浩二(広島東洋カープ)も昭和40年代では発展途上の選手であり、ブレイクするのは昭和50年代に入ってからである。

ホームランだけではない。張本勲(東映フライヤーズ)は、4年連続首位打者。盗塁は昭和47年の福本豊の106盗塁は未だに破られない日本記録だ。福本豊は翌48年にも95盗塁を記録したが、同年、島野育夫(南海ホークス)は61個も記録して盗塁2位。この年のセ・リ

塚原 隆

リーグの盗塁王は高木守道(中日ドラゴンズ)の28個。島野育夫はセ・リーグだったらダントツの盗塁王だった。投手陣だって近鉄バファローズの鈴木啓示の5年連続20勝、阪急ブレーブスには野球殿堂入りのヨネカジコンビ(米田哲也、梶本隆夫)が全盛期を過ぎたものの元気で投げ続けていたし、足立光宏、山田久志もいた。各球団には20勝の出来るエースが存在した。

この時代の交流戦が行われていたらパ・リーグ各球団ともジャイアンツとの対戦では苦戦をするが、他のセ・リーグ5球団との対戦なら負けるはずがない。阪急ブレーブスや南海ホークスあたりが交流戦のペナントを奪し、パ・リーグチームが上位に食い込んだと思われる。

過ぎ去ったことを考えても仕方がないのだが、もしかしら1950(昭和25)年のパ・セ両リーグ誕生以来、パ・リーグが圧倒的に強いのは不変だったのかもしれない。日本シリーズでジャイアンツという単独チームがV9を達成したためにセ・リーグが格上という印象がってしまったのは残念である。

交流戦はD日制のないセ・リーグが不利と言われていたが、セ・リーグチームにとっては札幌、仙台、福岡などへの遠征も大きな負担になっていることだろう。でもそんなこと言い訳にしか聞こえない。セ・リーグの本拠地ではパ・リーグ投手もそこそこ打っているし、大体D日制そのものをとやかく言うのであればセ・リーグもD日制を採用すれば良いのだと思う。遠征についてはメジャーリーグの移動を考えれば比較対象にもならない。勝つても負けても観客動員が減ることがなく、マスコミやファンからも見放されない構造がセ・リーグのレベルを低下させてしまったのだと思う。